

## ペルソナと関係の一考察

— トマス・アキナス『能力論』q. 9, a. 3-4 —

飯 塚 知 敬

### A Consideration on *persona* and *relatio*

— Thomas Aquinas : *De potentia* q.9, a.3 - 4 —

Tomoyoshi IIZUKA

はじめに

トマス・アキナスは『能力論』<sup>(1)</sup> 第9問題で神のペルソナについて考察している。トマスは第1項, 第2項でペルソナを「理性的本性を有する個の実体」(*rationalis naturae individua substantia*)と規定し, ペルソナを主にヒュポスタシスとの関連で説明している<sup>(2)</sup>。第3項, 第4項では神においてペルソナが如何なる仕方で見出されるのか, ということを問題としているが, そこでは主に神においてペルソナが絶対的なもの(*absolutum*)を意味すると同時に関係的なもの(*relativum*)をも意味するという二面性が問題とされている。二項の表題は次の通りである。

第3項 神のうちにペルソナがあり得るか

*utrum in Deo possit esse persona.*

第4項 神における<ペルソナ>という名称は関係的なものを意味するか, 絶対的なものを意味するか

*utrum hoc nomen <persona> in divinis significet relativum, vel aliquid absolutum*

ペルソナは「理性的本性を有する個の実体」として定義される。ここで問題となるのは「個の実体」(*individua substantia*)ということがどのような仕方と神に帰せられるか, ということである。人間は一人一人が別々の身体を持つ別々の存在として区別されている。それぞれのペルソナは身体という個的な質料を介して別々の存在をもっている。これに対して身体を持たない神においてペルソナは相互にどのような仕方と区別され, 互いに別々のペルソナとして存在し得るのか。神には質料もなく, 単純であり実体と付帯性の複合もないとすると三つのペルソナは何によって相互に区別されることが出来るか, といったことが問題となる。

トマスは, 先のように定義されるペルソナは人間・天使・神に共通に妥当すると考える。しかしそのラチオは人間の場合, 天使の場合, 神の場合にそれぞれより限定された仕方と見出されることになる。特に「個の実体」が具体的にどのようなあり方を意味するかによ

り、ペルソナの具体的な内容は大きく変わることになる。しかしトマスはそれをペルソナの多義性 (aequivocatio) としてではなく、表示の多様性 (diversa significatio) として説明しようとする。トマスはそれを一つには、我々があるものに一定の名称を帰する仕方に反省を加えることによって、また一つには神におけるあり方の特殊性を考察することで明らかにしている。

この小論においては第一章で第3項の説明を見ながら、我々が一定のラチオを持った名称をあるものに帰する仕方について反省する。第二章では第4項の説明を通して神のペルソナをめぐる特殊なあり方を検討し、それによりトマスの方法論について一定の考察を加えてみたい。

### 第一章 「ペルソナ」という名称を神へと帰することができるか

トマスは先に見たように第3項で「神のうちにペルソナがあり得るか」を問題としている。神にペルソナが帰せられるかどうか、ということは「理性的本性を有する個の実体」というペルソナの規定を、人間・天使・神に共通的にあてはめることができるかということである。異論では、そもそもペルソナという名称は舞台の上の人間の持つ仮面、役柄に由来する名称であった。それを神に帰することができるのかということが問題とされている。また先に触れたように「個の実体」を、質料を持たず同時に実体という特定の類に属さない神にそのまま帰することができるかということが問題とされる。

トマスは本論において、先ずペルソナが「ある本性を一定の存在様態とともに意味する」(significat quoddam naturam cum quodam modo existendi) とし、ペルソナの定義のうちに含まれる「理性的本性」も「個の実体」も、全ての自然本性のうちで最も高貴なものであり<sup>(3)</sup>、被造物において最も高貴なものを神に帰すべきであると結論する<sup>(4)</sup>。人間に固有な「理性的本性」という本性は、「知性的本性」(natura intellectualis) として神に帰せられ、個の実体という存在様態は自体的能動 (per se agere) として最高度に神に認められると考えられている。

#### 1) ある名称の措定—二つの側面から

第1異論解答においてトマスは名称とその帰属について次のように説明している。先ず、ある名称が措定される場合、次の二つの側面から考察されることができる<sup>(5)</sup>。

- (A) ある名称が「それを表示するために」(ad quod significandum) 取られているところのもの。
- (B) ある名称が表示するために「そこから取られている」(a quo imponitur) ところのもの。

あるものを表示するために (A)、当のものの働きや結果といった付帯性から (B)、一定の名称が取られる場合がしばしばある。トマスがよく挙げている例として、「石」(lapis) による説明がある。トマスによると「石」(lapis) という名称は「石」というものを意味表示するために (A) 取られるのだが、それは「足を傷つける」という「石」の持つ付帯性から (B) 取られている。つまり「石」(lapis) は「傷」(laesio) + 「足」(pes) として取られているというのである。

「石」という名称においてその主たる意味 (A) は物体としての石であり、「足を傷つける」という付帯的な出来事は、その石においてしばしば起こる出来事であり、語源として

間接的な仕方で入り込む (B) ことになる。

さて、ペルソナという名称について上の二つの側面から考えよう。

(A) ペルソナが「それを表示するために」取られているという面から考察されるならば、「知性的本性を有する個の実体」としてのペルソナは神に最もふさわしいものとして適合する。それは「善」(bonum), 「知恵」(sapiens) 等のように神に最も固有なものとして理解されなければならないのである<sup>(6)</sup>。

(B) しかしペルソナが「そこから取られているもの」という面から考察されるならば舞台上の人間の仮面や役柄等、神には適合しないことになる。

## 2) 「個の実体」をめぐる異論をめぐる

ペルソナが固有の仕方で表示するものからすれば、ペルソナは神に適合するというだけでなく、神に対して最も固有の仕方で帰せられなければならない。しかし同時にペルソナは「個の実体」であった。人間のペルソナに即して「個の実体」としての存在様態を考えると、次のような異論が生じてくる。

異論 4 個の実体としての人間は身体と魂の複合体を意味する。

異論 5 個の実体としての人間が相互に区別されるのは個的質料に基づく。

異論 6 個の実体としての「実体」(substantia) という名称は「～の基にあるもの」という意味であるから単純である神には不適切である。

異論 7 ペルソナはヒュポスタシスの下に含まれている。しかしヒュポスタシスは神には存在しない。ヒュポスタシスは付帯性に対する基体の意味だからである。

さて、異論 4、異論 5 は個の実体であるためには質料を必要とするというものである。トマスは、人間の場合個の実体であるために質料としての身体を必要とするが、それは人間の形相が神の形相に比べ完全性が低いためである。神の形相は完全であって、非質料的で単純であり、かつ個的に自存すると説明する。また神のような非質料的な形相はそれ自らによって個体化され、個体化のために個的質料を必要としない。しかしトマスは場合でも本性とヒュポスタシスの一種の複合は残ることを認めている。それは次の第4項での主題的な問題となる。

異論 6、異論 7 は、神においては実体と付帯性の複合を認めることができないという観点からのものである。実体と付帯性の複合は神において認められない。神は単純である。しかし我々人間の知性は神のエッセとそのエッセのもとにある実体を区別して認識する。その意味で「…の基にある」(subesse) ということは神に即して考えるならば神に適合しない。しかしトマスはここでもヒュポスタシスとペルソナの固有性のある種の複合を神自身に認めている。神には付帯性はないが、ペルソナを区別する固有性があり、それによるヒュポスタシスがあるからである。これが次項で問題とされる。

## 第二章 「神のペルソナ」の持つ両義性

続く第4項では神におけるペルソナは絶対的なもの (absolutum) を意味するのか、それとも関係的なもの (relativum) を意味するのか、が問題とされている。これは神における三位一体の理解と深く係わっている。ペルソナが絶対的なもの、本質のみを意味するとしたら神における三つのペルソナはそれぞれ実在的に同じものを意味することになり、神における三つのペルソナの区別は単に概念的なものに過ぎないことになろう。しかし実

際には神について「三つのペルソナ」(tres personae) というように、ペルソナは複数形で用いられ、神における三つのペルソナの区別は実在的である。

従ってペルソナの実在的区別を認めるためにはペルソナに関係的なものを認め、ペルソナが相互に実在的に区別されるのでなければならないだろう。しかしこの場合には、実在的な区別を生じる固有性がどのような仕方で神の共通の本性と、ある意味での複合を形成するのかということが明らかにされる必要がある。第一章で見たようにトマスは、神の単純性を認めながらも同時に神における本性とヒュポスタシスによる一種の複合を認めていた。その複合が明らかにされなければならない。

#### 1) 「神のペルソナ」をめぐる前提 (supponere) の方法

絶対的なものを意味する一方で、関係的なものも意味するという神のペルソナの二面性を説明するに当たり、トマスは先ず先行する見解について簡単な検討を行っている。それらの解決はペルソナという語を同名異義 (aequivocatio) とするものや、一義的な意味と二義的な意味を認めて解決をはかろうとするものである。しかしトマスはこれらの解答をいずれも退けている。トマスはペルソナという語の意味の考察だけで問題を解決できるとは考えていない。この二面性は神のあり方そのものから説明されなければならない。

トマスは、ペルソナという名称をそれが示すものと切り離して考察し、この名称の持つ二面性を明らかにするというやり方では不十分であると考えている。「神のペルソナ」という名称の持つ二面性は、それが指し示すものとの関係において具体的に考察されなければならない。そのような方法が「神のペルソナ」という名称において前提 (supponere) されているものを明らかにするという方法であると考えられる。以下においてトマスの本文における考察に即して具体的に見ていくことにする。

①ペルソナは「理性的本性を有する個の実体」と定義されたが、ペルソナは人間・天使・神に共通的に述語される。従って人間から神について述語される時、ペルソナのラチオは「理性的本性」が「知性的本性」へと変更される。また人間の個の実体は形相と質料の複合を前提するが、神においては単純形相がそれ自身により自存し個体化される。従って、非限定的な共通的なものとして定義されていたペルソナは、神に帰せられることにより、神のペルソナにおいてはその独特のあり方が前提supponereされていることが明らかになる<sup>(7)</sup>。それは例えば、「動物」(animal) において「感覚を有する生命づけられた実体」という非限定的な仕方で意味されていたものが、「人間」(homo) へと帰せられることにより、「理性的魂により生命づけられた実体」というより限定的な仕方で表明され、その中に前提されていたものが明らかになってくるようなものである<sup>(8)</sup>。

②名称の表示には形相的 (formaliter) な仕方で表示されるものと質料的 (materialiter) な仕方で表示されるものがある。形相的な仕方で表示されるものは第一章で見た (A) の場合のように「名称がそれを表示するために第一に取られたもの」であり、例えば「人間」が「身体と理性的魂からなる複合体」を意味するという場合である。これに対して質料的に表示されるものは「その内においてそのようなラチオが保持されるもの」であり、例えば「人間」は「心臓や脳などの諸部分を有するあるもの」を意味することになる<sup>(9)</sup>。

③「ペルソナ」は共通的に取られると「理性的本性を有する個の実体」以外ではなかった。そしてそのようなペルソナのもとには「個の実体」が含まれている。それ故、人間・天使・神のいずれにおいても、ペルソナが帰せられる時、そこには通約不可能性、他者と区別さ

れてあることが含まれている<sup>(10)</sup>。その意味では神のペルソナの意味するものは「神の本性において区別されて自存するもの」、人間のペルソナの意味するものは「人間の本性において区別されて自存するもの」以外ではなく、これらがペルソナの形相的な意味とされる。

④人間のペルソナが「他者と区別されて自存するもの」を表示する時、それは「個的質料により個体化されたあるもの」である他はなく、これが人間のペルソナの質料的な意味とされる。同様に神のペルソナが「他者と区別されて自存するもの」を意味する時、それは「関係によって他のペルソナと区別されたあるもの」を意味し、これが神のペルソナの質料的な意味とされる。というのも神において絶対的なものは全て共通的であり、非限定的なものであり、他者と区別するものは関係以外にはないからである。

⑤トマスは神におけるペルソナの形相的意味は「神の本性において区別された自存体」であり、また質料的意味は「関係ないし関係的なもの」としている。そして関係は例えば「父性」(paternitas)といった本質としてではなく、実体の様態としての「父」(Pater)が神のペルソナの質料的意味であるとする<sup>(11)</sup>。そしてこの関係的なものは「神のペルソナ」において質料的意味として間接的な仕方の意味表示されているとする。

## 2) 「神のペルソナの両義性」に関する異論をめぐって

異論の多くは、「神のペルソナ」のラチオにおいて「絶対的なもの」と「関係的なもの」とはカテゴリーを異にするため両者は相互に相容れないということを前提する立場からのものである。従って「神のペルソナ」という名称は絶対的なものを意味し、同時に関係的なものを意味することはできないと結論づけていずれかのみを表示すると結論するか、あるいは両方を意味することを認める立場では、「神のペルソナ」は同名異義(aequivocatio)であると結論づけるものである。

しかしそれは人間においてペルソナと言われる場合の議論を前提した上で、両者を二者択一的に考えて解決しようとするものである。これに対してトマスの考察は、人間・天使・神のそれぞれについて「ペルソナ」という名称が帰せられる場合、それぞれにおいて前提されているものを明らみに出すという方法に基づくものであった。そのことにより「神のペルソナ」の具体的な意味内容が明らかになり、それと同時に神における特殊なあり方が明らかになるという方法を取っている。

そのことにより「神のペルソナ」の形相的意味と質料的意味を区別し、「他者と区別された自存体」という「神のペルソナ」の質料的な意味を、関係的なもの(relativum)に基礎づけることで間接的に関係が意味されることを明らかにした。この背後には神において関係は関係づけられるものと同一であること、本質はその存在と同一であるというトマスの基本的な立場がある。

## 考察のまとめ

第一章において名称の措定に際して二つの側面があることを見た。それは「それを表示するために名称が取られるもの」と「そこから名称が取られるもの」の区別であった。「そこから名称が取られるもの」はものの働きや結果であることが多く、現象として身近なものであり得る。そして「そこから名称が取られるもの」と区別され、改めて「それを表示するために」名称が取られるものは、例えば神という直接の感覚的経験を越えた存在である場合もある。このようなものにある名称を帰することが妥当かどうかということ

判断するためには「表示されるべきもの」と名称の有するラチオとの対等関係の吟味が必要となる。

第二章はこの「表示されるべきもの」と自分の有する「名称のラチオ」との相互比較を通して、「表示されるべきもの」が正しく表示されるために、名称のラチオに前提されるものは何かを明らかにする方法が考察された。それは名称のラチオのより具体的な内容を明るみに出すことであるが、そのことにより「それにより表示されるべきもの」のあり方についても一定の解明が行われることになる。トマスの方法はその意味で先行の解決と比べ、方法自身が画期的なものであったといえることができる。このトマスの方法についての一般的な検討と評価はまた別の機会に譲らなければならない。

### 註

- 1) テキストはマリエッチ版を用いた。
- 2) *rationalis naturae individua substantia* : この定義をめぐっては拙論「ペルソナとヒュポスタシスの一考察」(長崎大学教育学部紀要—人文科学—68) 参照。
- 3) *De pot.* q.9,a.3,c. *Natura autem, quam persona in sua significatione includit, est omnium naturarum dignissima, scilicet natura intellectualis secundum genus suum. Similiter etiam modus existendi quem importat persona est dignissimus, ut scilicet aliquid sit per se existens.*
- 4) *De pot.* q.9,a.3,c. *Cum ergo omne quod est dignissimum in creaturis, Deo sit attribuendum, convenienter nomen personae Deo attribui potest, sicut et alia nomina quae proprie dicuntur de Deo.*
- 5) *ibid.* ad1, *in nomine aliquo est duo considerare: scilicet, illud ad quod significandum nomen imponitur, et illud a quo imponitur ad significandum.*
- 6) *ibid.* ad1, *Quando vero res significata per nomen Deo convenit, tunc illud nomen proprie Deo dicitur, sicut bonum, sapiens et huiusmodi;*
- 7) *De pot.* q.9,a.4,c., *Id autem cui attribuitur nomen, si sit recte sumptum sub re significata per nomen, sicut determinatum sub indeterminato, dicitur supponi per nomen;*
- 8) *ibid.* c., *homo vero recte sumitur sub ratione animalis, sicut determinatum sub indeterminato. Est enim homo substantia animata sensibilis tali anima, scilicet rationali;*
- 9) *ibid.* c., *Formaliter quidem significatur per nomen ad id quod significandum nomen est principaliter impositum, quod est ratio nominis; sicut hoc nomen homo significat aliquid compositum ex corpore et anima rationali. Materialiter vero significatur per nomen, illud in quo talis ratio salvatur;*
- 10) *ibid.* c., *Et quia sub substantia individua rationalis naturae continetur substantia individua, — id est incommunicabilis et ab aliis distincta, tam Dei quam hominis quam etiam Angeli,*
- 11) *ibid.* c., *Et propter hoc potest dici, quod significat relationem per modum substantiae, non quae est essentia, sed quae est hypostasis; sicut et relationem significat non ut relationem, sed ut relativum, id est ut significatur hoc nomine Pater, non ut significatur hoc nomine paternitas.*